

1年間の成果、花開く < SS 発展探究『課題研究』発表会・SS 部研究発表会報告 >

◇期 日:令和8年1月30日(金)第5・6時限

◇場 所:本校第一体育館

◇発表者:富山中部高校探究科学科2年生、SS部員

「SS 発展探究『課題研究』発表会・SS 部研究発表会」では、理数科学科・人文社会科学科の生徒が数人の班に分かれ、班ごとに設定して1年間取り組んできた専門的なテーマの研究成果をポスターセッション形式で発表した。併せてSS部員も日頃の研究を披露した。

会場は県内外の高校の先生、保護者、日頃指導をしてくださった富山大学の教授たちでにぎわいを見せた。今年は隣接する芝園中学校の1・2年生240人が見学に訪れポスターセッションに参加し積極的に発言する姿も見られた。それぞれの発表は発表者が用意した説明パネルや資料、研究によっては実物を用いて視覚的に訴える工夫がなされており、来場者を引きつけていた。

開会式の後、探究活動の集大成となるポスターセッションが始まり、数学、化学、物理、生物、国語、英語、社会の7分野の多様性に富んだ発表が繰り広げられた。発表は2枚のポスターを軸にした5分程度の口頭説明ののち、聴衆との質疑応答を繰り返すスタイルで進行した。どの班も説明時間を効率よく使い、限られた時間内に1年間行ってきた研究の目的や手法、得られた考察の要点を明確に伝えようとしていた点が印象的だった。特に質疑応答の時間が長めに確保されていたため、発表側と聴衆の対話が活発になり、単なる成果報告にとどまらない学びの場が形成されていた。質疑は内容の確認から研究の前提や方法に関する鋭い指摘まで幅広く、発表者は的確に回答するだけでなく、新たな視点を得て次の課題を見出している様子で、発表に対する質問や意見だけでなく、多彩な視点からの助言も飛び交っていた。教授陣は研究時の指導の延長線上で鋭い指摘や助言を行い、実践的な改善点やさらなる研究への観点を示してくださったので、発表者のみならず聴衆にも新たな知見を得られる素晴らしい時間となっており、一方的な発表には留まらない、相互に対話により深く学びあう雰囲気を感じた。自分たちの発表がないコアタイムには他班のポスターに積極的に足を運び、専門用語の説明や結果の解釈、論理的な厳密性などについて活発に意見交換をしていた。

閉会式では、富山大学の教授2名から講評があった。両教授とも高校生の研究を好意的に受け止めてくださったうえで、理数系の教授はAI時代の研究者にとって好奇心に突き動かされる営みが重要であるという話をしてくださり、AIが賢すぎて人が参加する意義があるのかという発表者一人ひとりが身をもって体感している疑問に解決の道を開いてくださった。そして、身近に接した研究者の存在は、生徒にとって研究への強いモチベーションとなり、研究の質をさらに高める強い助けになっていると感じた。

今回の発表会を通じて、発表技術の向上だけでなく、問いを深める姿勢や他者との対話を通じて研究を鍛える重要性を改めて確認できた。特に質疑応答の場で示された様々な視点は参考になり、1年生にとっても2年次の発展探究への大きい道しるべとなったと思われる。

